



# 複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第9号

## ◆挨拶

## 明治大学大学院院長・総括責任者 吉村武彦



今日、大学人に「人材養成の目的を明示し、学位の授与要件と修得すべき知識・能力の内容を具体的・体系的に提示し、カリキュラムを構築する」ことが求められています。このような大学院教育を組織的に展開することは、確かに重要なことで、日本の学問と科学技術の発展にとって必須のことです。

こうした大学院教育の実質化が求められていますが、学問の性格も影響しているのか、人文科学分野での展開はなかなか困難です。そのため、COEやGPのプロジェクト型プログラムが設定され、われわれも大学の支援を得て、GPプログラム「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」に取り組んできました。実質2年間半という短い期間でしたが、それなりの手応えを感じています。また、波及効果も出てきています。このGPプログラムの成果と課題をきっちり総括し、次の新たな取り組みへの糧にしていく必要があります。

このニューズレターは、われわれの取り組みを大学内外に発信するために発行され、ここに9号を迎えることになりました。他大学院GPのニューズレターにも学び、ビジュアルでわかりやすいレターにすることを心がけてきました。最近では、学会の折などに、励ましの言葉をもらうことも少なくありません。ただし、残念なことですが、この号でとりあえず最終号となり、今後はホームページなど別のかたちで発信を続けていくこととなります。ニューズレターの刊行は、研究推進員・RAや嘱託職員の方々の支援で作成されてきましたが、ここに心から感謝の意を表明したいと思います。

なお、日本古代学教育・研究センターは、2011年度も継続し、引き続き大学院教育の改革に取り組んでいきます。皆様のご支援をお願いします。

### 目次：

文化継承学	2
総合史学研究	3
サブゼミを行なって	4
2010年度博士學位論文紹介	10
2010年度研究業績	12
プログラムの軌跡	16

国際学術研究会をもとに、新たな執筆者も加えた書籍が刊行されました。

石川日出志・日向一雅・吉村武彦編

『交響する古代—東アジアの中の日本—』

東京堂出版 2011年3月25日発行



## ◆文化継承学

「文化継承学」は文部科学省大学院教育改革支援プログラム「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」のカリキュラムの一環として実施される科目である。今年度は金曜日の夜（18：00～21：10）の時間帯に二コマ連続（隔週）で実施された。

本授業は、学問の細分化・研究成果の膨大化により、全体像が見えにくくなっている現状を踏まえ、歴史文化の総体に多様な角度から迫り、今日の日本が継承すべき文化の基層・原点を明示することを目的としている。そこで授業では、専門を越えた学問的・人間的交流の中で、新たな知見や発想を修得することを目指している。

具体的には、同時時間帯に開催される授業のうち、文化継承学Ⅰでは、日本文学・考古学・日本史・東洋史の四分野にわたる教員・推進員・院生の参加を得、また二回の合同授業の回には文化継承学Ⅱの多様な発表者も迎え、多角的な議論が行われる場として機能してきた。

### ◇参加記

研究推進員 渡辺 滋

本年度の参加者は、石川日出志・氣賀澤保規・永藤靖・神鷹徳治（以上、文学部教授）・小笠原好彦・加藤友康・神野志隆光（以上、大学院特任教授）・沈慶昊（客員教授）の8名に、高橋麻織・谷畑美帆・渡辺滋（GP研究推進員）の3名、そして院生9名からなっていた。この計20名の参加者を得て、一年間にわたり、各人の専門分野にとらわれない、多様な内容の研究発表と質疑応答がなされてきた。

毎回2名の発表者を用意し、それぞれが60分程度の口頭発表を行い、それに対して質疑応答が30分程度なされるという構成を採った。授業は、質問に対する受け答えのスタイルから始まり、パワーポイントなどを利用したプレゼンテーションの技術を修得する場としても機能していた。

具体的な参加者の専攻と発表順は、下記の通りである（各人の発表内容に関しては、紙幅の都合もあり省略する）。

4月16日（金）	自己紹介と発表日の決定	
4月30日（金）	石川日出志（考古）	小笠原好彦（考古）
5月14日（金）	神野志隆光（日文）	沈慶昊（日文）
5月28日（金）	永藤靖（日文）	沈慶昊（日文）
6月11日（金）	石川日出志（考古）	他
6月25日（金）	氣賀澤保規（アジア史）	他
7月9日（金）	神鷹徳治（日文）	金澤典子（日文）



9月24日（金）	高橋麻織（日文）	他
10月8日（金）	志村佳名子（日史）	他
10月22日（金）	成耆赫（日文）	木村淳也（日文）
11月19日（金）	加藤友康（日史）	渡辺滋（日史）
12月3日（金）	沈慶昊（日文）	他
12月17日（金）	その他	
1月14日（金）	谷畑美帆（考古）	他

このような形式のゼミナールを一年間の長きにわたって繰り返すことで、たとえば発想や問題意識の点で触発されたりする機会は、かなり多かったはずである。そのため、教員と院生の中間地点に立つ研究推進員として見ると、授業設置の所期の目的は達成されたものと判断された。

とはいえ来年度以降、さらなる効果的な教育・研究活動の展開を目指すためにも、院生のより積極的な参加・発言を期待できるよう、当日の発表者だけでなく、参加者全員の問題意識の涵養・授業形式の工夫に努めることも望まれよう。

## ◆総合史学研究

日本古代の歴史・社会構造・諸文化の様相を、さまざまな史・資料から立体的に解読・解析する力を養うことを目的としているこの講義は、考古学・史学・文学の教員と院生が参加する、まさに学問領域を横断するものであった。前期は研究方法に関する講義を、後期は基本文献の講義を行った。院生による修士論文の構想発表もあり、三分野の研究の相違点と共通点を見出すことになった。なによりも強く感じたことは、専門外の人に専門研究をわかりやすく伝えるには、研究を体系化しなければならないということである。それはとかく自分の専門分野にのみ目を向けがちな研究を、他の視点から眺めようとする複眼的研究態度を養うことにもつながっている。多くの刺激を受けた講義であった。

(堂野前彰子)



## ◇授業に参加して

佐野 愛子 (博士前期課程 1年)

文学・歴史学・考古学という枠を取り払い、自身の研究分野とは異なる分野の研究を理解し、なおかつ自身の研究に取り込めるような力を養うことを目的として開講されている総合史学研究はその目的通り、多分野にわたり先生方がいらっしゃる授業であった。

私自身の研究分野は文学であったが、他の史学や考古学の研究分野を学びたいとの思いから、一年間この授業を受講した。今年度、前期課程一年生で総合史学研究を受講したのは文学が私を含めて三名、史学が一名、考古学が二名と学生の分野別のバランスも良かったように思う。

授業は先生方がそれぞれの分野ごとの研究方法について発表する形ではじまった。私は学部時代にそれほど、史学の研究には触れてこなかった。そのため、史学の分野から、古代を見ることは大変興味深いものであった。

また先生方の発表で何より参考になったのは、その後行われる討論である。私にとって、他分野の研究方法は聞いて理解することだけで精一杯であったが、先生方のその後行われる討論によって、研究内容がさらに明確になったり、問題が明らかになったりと、発表についての理解が深まった。さらに発表を受けて、その研究の補足が別の分野の先生



からなされることもあり、資料を様々な視点から見る方法を学ぶことができた。

先生方の発表後は、修士論文にむけての院生の発表が行われた。発表後、先生方からいただけるアドバイスはどれも今後の参考になるものばかりであった。中には、厳しい意見も多くあったが、自身の修士論文の課題が見えてきたように思う。また、他分野の専攻をしている院生に発表をするときには、わかりやすい発表をしなければ伝わらないということも感じた。この授業で学んだ様々な分野の研究手法や、先生方からいただいた修士論文へのアドバイスを常に心がけながら、今後の研究に生かしてゆきたい。

## ◆サブゼミを行なって

### ◇『三国遺事』を読む

担当：研究推進員 堂野前彰子



サブゼミ「『三国遺事』を読む」は毎週金曜日に、古代日本文学の院生4名を中心として総勢8名で行った。昨年度より参加していただいている袴田氏・金氏に加え、本年度客員教授である沈先生を迎えてのサブゼミは、今までは手をつけられなかった郷歌の解説をも試み、『三国遺事』の解釈を深めることができた。日韓の差異に目を向けがちであった前年度からすると、文化の類似やその伝播にまで考えが及ぶようになり、国境に横たわる日本海がかつては境をなすものではなく、交易・交流を促すものであったことを改めて感じた。このサブゼミは院生の複眼的な視点を養う一助となった。

### ◇『小右記』講読

担当：研究推進員 高橋麻織・渡辺滋

『小右記』長和五年(1016)正月の記事を取り上げ、四方拝・元日節会・臨時客・白馬節会・除目などについて、内裏図や公卿補任を確認しつつ読み進めていった。特に、長和五年は三条天皇から後一条天皇への代替りの年にあたるため、讓位・即位の日時の勘申など特別な事情が窺われ興味深い。最も印象に残っているのは、宣命が紛失する事件で、ここからは当時の貴族たちの政治・生活・慣習などが生き生きと感じられた。

日本史学が専門ではないため戸惑うことも多かったが、渡辺滋研究推進員や加藤友康先生のおかげで、古記録の読み方の勉強ができ、私にとっても非常に意義のあるサブゼミだったと思う。『源氏物語』など平安時代の文学作品の研究にも、史料の読解能力は求められてくる。日本文学の院生や留学生たちからは、「わかりやすくなった」という声を多数もらった。これからも時間があれば、古記録を読む勉強会などを開いていきたい。



(高橋麻織)

### ◇『古事記』を読む

担当：研究推進員 堂野前彰子



サブゼミ「『古事記』を読む」は、毎週火曜日に、古代日本文学の院生4名とともに『古事記』と『日本書紀』を交互に神武天皇条から読み進めてきた。当初は比較対象としてのみ考えていた『日本書紀』だが、『古事記』の解釈を深めていく中で併読は必要だと感じたからである。その結果、神話や伝承の配列順や採録する基準などが明らかとなり、それぞれの書物の特色を浮き彫りにすることができた。参加した院生から、今までは関連記事のみを読み、一つの流れとして読み進めることがほとんどなかった『日本書紀』の世界観がわかり、修士論文において記紀歌謡論を展開するのに役だったという声を聞いている。院生の研究に即したサブゼミとなった。

## ◇英文購読の会

担当：研究推進員 谷畑美帆

本ゼミは、考古学という研究分野における基礎文献である『Archaeology』および『Digging up Bones』の講読を中心として実施されてきたものである。本研究分野において英文講読の機会を持つことは残念ながら容易ではなく、特に自らのテーマを日本考古学に絞った学生にとっては、なじみがない。しかし、読み進めていくにつれて、自らのテーマ・関心を深めていくことが可能となり、刺激的なゼミとなっていった。本ゼミでは、単なる英文講読にとどまらず、各自のテーマに合わせて、講読を進めていったため、今後彼らが執筆する学位論文の質を上げる手がかりの一つとなったであろう。時間的な制約もあり、今年度でゼミは閉講してしまうのが残念であるが、今後も機会があれば、学生のニーズに従って実施していきたいと考えている。



## ◇金石文読解の方法

担当：研究推進員 荒木志伸



石造文化財研究の最新の調査方法と成果について、パワーポイントを使いながら解説した。野外に存在する墓標・供養塔・石碑は、日本列島において古代から現代にいたるまで連綿と営まれた歴史資料である。近年、全国各地の墓地・霊場において、精力的に悉皆調査がおこなわれるようになってきている。考古学(形式・石材・法量)・文献史学(文字内容)など、複眼的な視点から調査・研究することによって、それぞれの地域の政治・経済・信仰(宗教)について解明することが可能となる。石塔の形式や石材の歴史の変遷、戒名から判明する情報と調査時に留意せねばならない点について、具体的な事例をあげて説明した。また、調査の方法については、山形県天童市佛向寺や山形市立石寺での実践例もあげつつ、講義を行った。

## ◇北東北の城館と遺跡

担当：研究推進員 荒木志伸

東北日本プログラムのフィールドワークで学ぶ遺跡・史跡や見学先の博物館について、事前に理解を深めることを目的として開催したサブゼミである。日程(見学予定)表を示しながら、時代順に縄文時代から中世まで、それぞれの立地・特徴・内容・見学のポイントを詳しく解説した。特に、発掘調査現場を訪問する林の前遺跡については、見学の際の注意点について述べると共に、古代防御性集落に関する研究史について説明した。また、中世城館については多数見学するため、根城・浪岡城・中里城について、時代背景やそれぞれの城主、構造的な違いなどの特徴的な内容について解説し、合わせて史跡整備の特徴とチェックポイントについて解説した。講義終了後に質疑応答の時間帯を設け、フィールドワークへの疑問を解消するよう努力した。



## ◇恐山と東北の霊場について

担当：研究推進員 荒木志伸

東北日本プログラムフィールドワークで訪れる恐山について、東北地方の霊地・霊場という観点から理解を試み、事前に学習することを目的としたサブゼミである。恐山は、下北半島中央部に位置する外輪山・霊場で、高野山・比叡山とならぶ日本三大霊場の一つである。恐山の概要についてパワーポイントで説明した。また、東北地方には慈覚大師円仁にゆかりのある霊場が多数存在し、その背景についても話をした。岩手県平泉中尊寺・毛越寺、天台寺、宮城県松島瑞巖寺、山形県立石寺について特徴を示した上で、恐山の特徴について明らかにした。

講義では、それぞれの霊地・霊場に纏わる文献史料や『奥の細道』などの文学作品や、考古学資料など多岐にわたる資料を素材として扱った。質疑応答の時間帯では、恐山見学時の注意点やイタコについての疑問に対して回答した。



## ◇古代の鎌倉、文学の鎌倉を学ぶ

担当：研究推進員 荒木志伸・渡辺 滋

- ・日時：2011年2月16日（水）10時30分から
- ・引率：特任教授 小笠原好彦  
研究推進員 荒木志伸・渡辺滋
- ・学生：6名
- (10:30) 鎌倉駅東口集合  
↓ 徒歩
- (10:45～11:45) 鶴岡八幡宮  
↓ 徒歩
- (12:05～12:35) 寿福寺  
↓ 徒歩
- (12:45～13:40) お昼休憩  
↓ 徒歩
- (14:00～14:45) 御成小学校  
↓ 徒歩
- (15:00) 鎌倉駅  
↓ 江ノ電
- (15:30～16:15) 鎌倉大仏殿高徳院  
↓ 徒歩
- (16:25～16:50) 長谷寺  
↓
- (17:00) 鎌倉駅・解散



2月16日、古代の鎌倉の歴史・文学を学ぶサブゼミが行われました。2月としては珍しい晴天とあたたかな陽気にもめぐまれ、分野を超えて互いに親睦を深めつつ学ぶ貴重な機会となりました。

10時半に鎌倉駅で集合し、まず徒歩で鶴岡八幡宮へと向かいました。若宮大路を歩いて15分ほどで到着し、本殿に参拝しました。源実朝を祀る白旗神社を經由し、頼朝の墓や伝大江広元の墓へ足をのびします。現地では、墓の

手前に平場が存在し一体の空間として使われていた可能性や、やぐらの構造、幕末に墓が整備された歴史的経緯などについて研究推進員が解説しました。八幡宮へ引き返す際には、頼朝が当初に設置した大蔵幕府の所在比定地として有力な清泉小学校付近を経由しました。周辺が鎌倉時代の中核拠点であり、六浦からのルート上が一つの中心的なラインとなっていることを確かめました。

八幡宮の手前から、扇が谷に所在する寿福寺へ向かいました。栄西の開山による鎌倉五山第三位の格式を与えられた臨済宗寺院で、古代における六浦からのルート上でも非常に重要な地点です。配布資料の古代道路推定ラインの図面をふまえながら、かつての古代ルートと中世の景観を比較しつつ歩きました。また、奥手の裏山には北条政子・源実朝の墓と伝えられるやぐら（五輪塔）があります。先に見学した頼朝の墓などと、立地や構造に異なる点がみられることは興味深い点です。境内には神式の墓や著名な文学者をはじめとする様々な墓標がみられ、その特徴や変遷について研究推進員から解説を行いました。

寿福寺を出て、小町通りで昼食をとったのち、ふたたび古代道と重なる可能性のある御成通りを南下して、20分ほどで御成小学校に到着しました。ここは、古代鎌倉郡家や中世の武家屋敷など、貴重な発見が相次いだ今小路西遺跡のあった場所です。小笠原先生からの配布資料をもとに、神奈川県下の郡家遺跡と今小路西遺跡の特徴について講義をしていただきました。郡家の庁殿は一般的には南側を最も重要な門と認識して開口するのに対して、今小路西遺跡の庁殿の門は東側が強く意識されています。これは、古代道が遺跡の東側を通過していたことが影響していそうなことが、現地立つとよくわかります。科学分析からはのちの時代のメインストリートである若宮大路は湿地帯のような状況であったことが判明していることから、古代の道は安定した地を選び設定されていたのでしょうか。その結果、



郡家がこの地域に選地されることが妥当であることなどがよく理解できました。その場に行って、考えることの重要性を、改めて痛感するよい機会となりました。

いったん鎌倉駅に戻り、江ノ島電鉄に乗って長谷駅で降り、鎌倉大仏殿高德院へ向かいました。特に大仏の内部の見学は圧巻でした。小笠原先生から奈良の大仏の作り方も含め、大仏の内側に残る痕跡を解説していただきました。また、与謝野晶子の碑も見学しました。その後、長谷寺へ向かい、天平年間の縁起も有する十一面観音像を参拝しました。その後、由比ヶ浜へと歩いていき、鎌倉の海・川・山の景観を確認して、盛り沢山の現地見学会を終了しました。

鎌倉というと、中世のイメージが強くありますが、万葉集や古事記にもその地名が既に登場し、今小路西遺跡のような古代行政の中心地も考古学的に確認されています。つまり、鎌倉に幕府がおかれた理由を考える上で、前時代からの基盤を十分考えることが必要になるわけです。文学・歴史・考古学の知識を総動員した結果、鎌倉のまた違った側面について、今回のサブゼミで体感できたのではないかと思います。  
(荒木志伸)



## ◇国立歴史民俗博物館における史料熟覧

担当：研究推進員 渡辺 滋・高橋麻織

日時：2011年2月25日（金）13～17時

場所：国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）第二修復室

担当：文学部教授 日向一雅 特任教授 加藤友康

研究推進員 渡辺滋・高橋麻織

学生：8名

2月25日（金）の午後、国内有数の古典籍・古文書を所蔵する国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）に赴いた。

それに先立つ2月21日（月）13～14時30分には、明治大学駿河台校舎で事前勉強会を開催した。その場では、参加予定の院生全員とともに、史料調査の基本的な心構えや、重要文化財5点をふくむ計11点の熟覧予定史料の性格などについて勉強を行うなど、準備も万端に調査の当日を迎えた。

当日の熟覧は、まず日本文学関係の史料からはじめた。具体的には、『源氏物語』・『古今和歌集』の鎌倉期写本や、『河海抄』の室町期写本などを対象に、高橋推進員の指導で調査を進めた。その結果、鎌倉期～室町期にかけての平安文学享受の諸相を、より明確に理解できるようになった。

その後、日本史関係の史料の熟覧に移った。具体的には渡辺推進員の指導の下、「造仏所作物帳」（正倉院文書）・「備前国津高郡収税解」（唐招提寺文書）・「東大寺奴婢帳」（東大寺文書）などの奈良期の古文書を調査し、律令制施行期における文書行政のあり方などについて、具体的な知見を得た。そのうえで、平安期の『愚昧記』（自筆本）・『顕広王記』（自筆本）・『九条殿遺誠』・『春記』・『中右記部類』などの調査を行った。これら平安期の貴族の残した日記類の現物や古写本を調査することで、当時の社会の様相をより明確に理解できた。



本）・『九条殿遺誠』・『春記』・『中右記部類』などの調査を行った。これら平安期の貴族の残した日記類の現物や古写本を調査することで、当時の社会の様相をより明確に理解できた。

調査の過程で、日向一雅（文学部教授）・加藤友康（大学院特任教授）の両教授からも様々なご指導をいただき、写真や活字本のみからではわからない各種の情報を、史料現物からどれだけ取り出すかという訓練を行う上で、非常に贅沢かつ有意義なサブゼミとなった。

参加者は日向・加藤の両教授以下、研究推進員・院生を含めて計13名だった。実施後、この種の活動は、今後も継続的に進めていく必要があるとの実感を強く受けた。（渡辺 滋）

## ◇韓国語を読む会

担当：リサーチ・アシスタント（RA）李 興淑

「韓国語を読む会」では、一年近くハンゲルの読み、書きなどの韓国語の基礎の習得を目指してきました。院生が一生懸命に学んだ甲斐もあって、ある程度、目標を達成できたと思います。学習の後半部では、院生の方が私よりも韓国語辞書を引くことが早くなり、その姿を見た時は本当に嬉しく思いました。研究の多忙さの余り、途中から参加出来なくなった院生もいましたが、韓国でのフィールドワークを通じて韓国の文化に接する機会に加えて、韓国語の学習にも足を踏み入れたことはよい機会だったと思われます。

「韓国語を読む会」でのハンゲル学習の経験が、今後の韓国語学習や韓国文化の理解、さらには研究においてもお役に立てたら幸いと思います。ご支援ありがとうございました。



◇ 2010年度のサブゼミ一覧

『三国遺事』を読む	日時 : 毎週金曜日 15:00~16:30
	場所 : 永藤研究室 (駿河台研究棟9階 935)
	担当 : 研究推進員 堂野前 彰子
『小右記』講読	日時 : 隔週金曜日 18:00~19:30
	場所 : リバティタワー 19階 119F教室
	担当 : 研究推進員 高橋 麻織・渡辺 滋
『古事記』を読む	日時 : 毎週火曜日 13:00~14:30
	場所 : 永藤研究室 (駿河台研究棟9階 935)
	担当 : 研究推進員 堂野前 彰子
「骨学入門」	日時 : 2010年6月16日(水) 14:00~16:00
	場所 : 駿河台キャンパス 11号館 考古学実習室
	担当 : 研究推進員 谷畑 美帆
英文講読の会	日時 : 月2~3回
	場所 : 駿河台キャンパス 12号館4階 事務局他
	担当 : 研究推進員 谷畑 美帆
金石文読解の方法	日時 : 2010年8月20日(金) 13:30~15:00
	場所 : リバティタワー20階 120N教室
	担当 : 研究推進員 荒木 志伸
恐山と東北の霊場について	日時 : 2010年9月7日(火) 10:40~12:10
	場所 : リバティタワー20階 120N教室
	担当 : 研究推進員 荒木 志伸
北東北の城館と遺跡	日時 : 2010年9月14日(火) 13:00~14:30
	場所 : リバティタワー8階 1081教室
	担当 : 研究推進員 荒木 志伸
古代の鎌倉, 文学の鎌倉を学ぶ	日時 : 2011年2月16日(水) 10:30~17:00
	場所 : 寿福寺・御成小学校(今小路西遺跡)・鎌倉文学館
	担当 : 特任教授 小笠原 好彦 研究推進員 荒木 志伸・渡辺 滋
国立歴史民俗博物館における史料熟覧	日時 : 2011年2月25日(金) 13:00~17:00
	場所 : 国立歴史民俗博物館
	担当 : 文学部教授 日向一雅 特任教授 加藤友康 研究推進員 渡辺 滋・高橋 麻織

◇ 学会への院生派遣  
— 2010年度中古文学会秋季大会 —

博士後期課程1年 芝崎 有里子

2010年度中古文学会秋季大会において、『落窪物語』における『遊仙窟』受容の方法—典薬助侵入場面について—というテーマで研究発表を行った。従来の『落窪物語』研究では、継子いじめの話型に注目した研究が先行し、漢籍受容についてはあまり検討されてこなかった。そこで本発表では、『遊仙窟』がパロディとして受容されているのではないかということ指摘した。

今年度の秋季大会は、10月2日から3日の2日間にわたり立命館大学(衣笠キャンパス)において開催され、第1日目は研究発表とシンポジウム、第2日目には研究発表が行われた。物語から歌集、漢詩まで多岐にわたる研究成果が発表され、平安文学がかかえるさまざまな課題が明らかとなった。

## ◆ 2010 年度 博士学位論文紹介

題 目	『球陽外巻 遺老説伝』本文と研究
学位取得者	木村 淳也（日本文学）

本研究の主眼は、日本文学における『遺老説伝』というテキストの捉え直しにある。オモロや神歌といった「韻文」を対象とした研究に傾斜する琉球文学研究の中にあつて、『遺老説伝』は、説話集という捉えられ方が幸いしてか、琉球の独自の民俗を内包するテキストとして読まれてきてはいた。しかし一方で、本書が何故説話集という形でこの時代に琉球に生成されなくてはならなかったのか、テキストのそれ自体の特徴にまで錘鉛を下ろした研究は殆ど無かったといつてよい。

本研究は、『遺老説伝』の本文の生成・性格・内容に関して、当時の周辺テキストとの距離を測り、また琉球王国という国家の在り方、社会背景を加味しながら、琉球文学・日本文学双方における今後の研究の基盤となるような基礎的かつ総合的な研究を行ったもの、とすることが出来る。



題 目	『源氏物語』と白居易の文学—「長恨歌」と諷諭詩を中心として—
学位取得者	西野入 篤男（日本文学）



本論では、白居易「長恨歌」と『源氏物語』における恋や死の問題との関わり、また社会風刺の言辞を含む諷諭詩が、物語のネガティブな主題性と結びつく様相を検証している。女君の死に繰り返される「長恨歌」引用を、「ゆかり・形代」といった物語の方法を意識しつつ引用句の差異を考察し、「長恨歌」に自己を仮託し、亡くなった女性との関係を捉え直す行為の意義を検証している。

また、『源氏物語』の諷諭詩引用は、同時代における白詩受容の実態と比較して特異であることが知られるが、中でも玉鬘の物語に引用される「傳戎人」は、漢にも蕃にも自己を位置付ける場を失う「戎」の物語性が、玉鬘の空間的流離のみならず精神的流離においても物語の基底として位置づけられることを述べ、従来とは異なる解釈の提示を試みている。

題 目	「典拠表現」から見る八世紀神話テキストの研究
学位取得者	山田 純（日本文学）

本研究は、8世紀神話テキスト—とくに『日本書紀』—を典拠表現から読解することを目的とする。日本最古の歴史書（720年成立）である『日本書紀』は、ほぼ全編が正格漢文で記述されており、多く典拠表現が用いられる。典拠表現は、先行する漢籍から数句を引用して作文する漢文修辞技法である。

この性格から、典拠表現は近代以降は「剽窃」として把握され、内容空疎な「文飾」として処理されてきた。そこに意味を見出そうとする研究は皆無であったのである。本研究はこの従来研究を批判し、『日本書紀』の典拠表現には主題に関わる重大な実意があることを論じ、その観点から『日本書紀』全体の読解を实践したものである。



## ◆東亜文化研究国際学術研討会

2011年2月16日から18日までの三日間、中国南通市にある南通大学にて、東亜文化研究国際学術検討会と称する国際シンポジウムが、中国南通大学・韓国延世大学・明治大学の三校共催のもと開催された。

これは南通大学と延世大学の共同研究センター「中韓文化研究中心」の設立を記念して開かれたシンポジウムであるが、日本やベトナム、香港の研究者が参加したこともあって、中国と韓国のみならず東アジア全般に関する研究発表がなされた。まさに東亜という名にふさわしい東アジアを視野に入れたものであった。16日は開会式・書籍贈呈式および基調



講演、17日は二つのセクションに分かれての研究報告、18日は南通市内の文化考察として南通大学内の范曾美術館や狼山・南通博物院・南通藍印花布博物館・南通珠算博物館の踏査が行われた。開会式では南通市長が挨拶をし、基調講演の様子がテレビやインターネットで発信されるなど地元では注目を集めた。

このシンポジウムは参加者が多く、そのすべての研究報告を聴くことは不可能であったが、今回参加して得た最も大きな収穫は、おそらく各国の研究者と交流する機会を得たことであろう。研究報告の合間のティータイムや夕食の円卓を囲んで、各国の研究者と研究方法や文化の違いを語り合うこともでき、今まではそれぞれの国において個別に行われていた文学研究が国境を越え広がりゆく可能性を感じた。日本と南通の交流の歴史は古く、かつて円仁が最新の学問を身に着けるべく入唐する際はじめて上陸したのも南通であった。このシンポジウムを契機として、今後南通大学との共同研究が始まることを期待したい。

### ◇参加記

博士後期課程 3年 木村淳也

本シンポジウムは、広く東アジア世界の文化を考えるというコンセプトのもと、発表者は総計 37 人に及び、対象地域としては日本・ベトナム・香港そして沖縄を含んだ、総合的学術会議と呼べるものであった。発表テーマは多岐に亘るものであったが、何れの発表も、中韓、中日、あるいは日韓などの二国間だけに留まるものではなく、東アジア全体の問題として捉えるべきとの意識を根本に持って為されており、自分の研究にとって新たな視点を得るものとなった。



各国の研究者の発表を拝聴して感じたのは、日本の研究機関や大学が持つ資料を、より多く外国の研究者に開示する必要性である。既存の研究からでは解消できない問題も、基盤を東アジアという部分に移し、異文化の視点から相対化することによって、新たな展開があると思われた。さらに表面上の交流だけでなく、各国の研究者、および研究機関による強固な連帯・連携がぜひとも必要であることも、このシンポジウムを通して痛感した。



## ◆ 2010 年度 研究業績

(2010年4月1日以降 2011年3月31日迄)

凡例) (1) 学術論文等 (2) 講演・学会・研究会発表 (3) 発掘調査報告書等 (4) その他

### ◇ 研究推進員

荒木 志伸

#### (1) 学術論文

- ・「城輪柵跡とその周辺ー 10～11世紀を中心としてー」『第37回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』2011年2月, pp.144-153
- ・「城柵型政庁の再検討」『古代学研究所紀要』16, 2011年3月(予定)

#### (2) 講演・学会・研究会発表

- ・「石造文化財からみた霊場 立石寺の変遷」日本考古学協会大会発表, 2010年5月, 於国土館大学
- ・「立石寺石造文化財の年代的・形式的検討と銘文内容について」東北史学会大会研究発表(考古学部会), 2010年10月, 於山形大学

#### (4) その他

- ・古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム, コメンテーター, 2011年2月, 於横手市ふれあいセンターかまくら館

谷畑 美帆

#### (1) 学術論文

- ・「古人骨から見る縄文・弥生時代」『考古学ジャーナル』10月臨時増刊号, 2010年10月, pp.1-3

#### (2) 講演・学会・研究会発表

- ・「縄文時代後期社会を考える」『日本考古学協会 第76回総会』2010年5月, 於国土館大学
- ・「骨病変から見る縄文・弥生時代」縄文大学, 2010年10月20日, 於飛ノ台史跡公園博物館
- ・「骨病変からみた日本の歴史」浅間縄文ミュージアム一般講座, 2010年11月6日, 佐久考古学会共賛

堂野前 彰子

#### (1) 学術論文

- ・(共著)『『遺老説伝』注釈(9) 一巻第一第六〇話～巻第二第六六話』六〇話担当『文学研究論集』33, pp.205-208, 2010年9月
- ・「古代日本文学における「墓」ーその形見としての機能ー」『文芸研究』112, pp.81-92, 2010年10月
- ・「境界を越えていく女ー『万葉集』を中心にー」『日本古代学』3, pp.51-64, 2011年3月
- ・「移動する神と人ー風土記を中心にー」『交響する古代ー東アジアの中の日本ー』pp.196-213, 東京堂出版, 2011年3月

#### (2) 講演・学会・研究会発表

- ・『『遺老説伝』に描かれた「嶽」ーその発生から機能を考えるー』奄美沖縄民間文芸学会大会, 2010年9月23日, 於沖縄国際大学
- ・「移動する神と人ー風土記を中心にー」国際学術研究会「交響する古代」, 2010年11月4日, 於明治大学
- ・「琉球説話集『遺老説伝』の世界ー「移住」と「往来」ー」東亜文化交流国際学術研討会, 2011年2月17日, 於南通大学

#### (5) その他

- ・堂野前彰子編著「奄美調査報告書」「奄美という島」『日本古代学』3, pp.103-111, 2011年3月

高橋 麻織

(1) 学術論文

- ・「『源氏物語』 准拠論の成立と展開—冷泉朝における光源氏の政治—」 *Journal of Korean Culture* vol.15, pp.34-57, 2010年8月
- ・「『源氏物語』 皇統の行方—匂宮への皇位継承をめぐる—」 『交響する古代—東アジアの中の日本—』 pp.394-413, 東京堂出版, 2011年3月
- ・「『栄花物語』『大鏡』—『源氏物語』における〈源氏〉—」 (高橋亨編) 『〈紫式部〉と王朝文芸の表現史』 森話社, 2011年3月

(2) 講演・学会・研究会発表

- ・「『源氏物語』 匂宮への皇位継承—相対化される冷泉院—」 古代文学研究会大会, 2010年8月9日, 於伊勢かぐらばりゾート千の杜
- ・「『大鏡』における〈氏〉意識—〈安和の変〉を起点として—」 明治大学高麗大学校国際学術会議, 2010年8月23日, 於韓国・高麗大校
- ・「『源氏物語』 皇統の行方—二人の若宮誕生と王権をめぐる—」 国際学術研究会「交響する古代」, 2010年11月6日, 於明治大学

中村 友一

(1) 学術論文

- ・「失符」に関する基礎的考察 『日本古代学』 3, pp.109-129, 2011年3月

(2) 講演・学会・研究会報告

- ・「人・部制の成立と展開—氏姓制との関わりから—」 あたらしい古代史の会, 2010年6月19日, 於東京女子大学
- ・「摂関期政務運営の様態—失符を通して—」 あたらしい古代史の会, 2011年1月8日, 於東京女子大学

(4) その他

- ・「(書評と紹介) 佐藤長門著『日本古代王権の構造と展開』」 『日本歴史』 743, 2010年3月
- ・「(史料・文献紹介) 岡森福彦『八色の姓と古代氏族』」 『歴史学研究』 866, 2010年5月
- ・「宇治墓」立会調査見学参加記 『歴史学研究月報』 604, 2010年4月
- ・「陵墓懇談会並びに事前検討会参加記」 『歴史学研究月報』 609, 2010年9月
- ・服部一隆・中村友一共編「文字瓦文献目録稿(増補版)」 『古代学研究所紀要』 14, pp.67-113, 2010年12月

渡辺 滋

(1) 学術論文

- ・『古代・中世の情報伝達—文字と音声・記憶の機能論—』 八木書店, 2010年10月
- ・「平安期における国衙—結節点としての地方「都市」—」 『交響する古代—東アジアの中の日本—』 pp.275-294, 東京堂出版, 2011年3月
- ・「受領像の形成過程—藤原陳忠の事例を中心として—」 『日本古代学』 3, pp.65-96, 2011年3月

(2) 講演・学会・研究会発表

- ・「受領像の形成過程—藤原陳忠の事例を中心として—」 早稲田古代史研究会, 2010年7月17日, 於早稲田大学
- ・「平安期における国衙—結節点としての地方「都市」—」 国際学術研究会「交響する古代」 2010年11月6日, 於明治大学

(4) その他

- ・「大会報告外部批判 遠藤報告を聞いて」 『日本史研究』 572, pp.34-38, 2010年4月
- ・駿台史学会選奨(駿台史学会), 2010年12月

## ◇リサーチ・アシスタント（RA）

李 興淑

## (1) 学術論文

- ・『河海抄』の『史記』引用における儒教的言説—『史記』の「四皓の故事」と「呂后本紀」を媒介に—『古代学研究所紀要』14, pp.3-11, 2010年11月
- ・「源氏物語の聖代観—礼楽思想を媒介に—」『明治大学文学研究論集』34, pp.197-205, 2011年3月
- ・「『源氏物語』の注釈書における礼楽思想—熊沢蕃山『源氏外伝』序をめぐる—」『日本古代学』3, pp.37-49, 2011年3月

## (2) 講演・学会・研究会発表

- ・「『源氏物語』の注釈書における礼楽思想—熊沢蕃山『源氏外伝』序をめぐる—」国際学術研究会, 2010年11月5日, 於明治大学

## (4) その他

- ・「『源氏物語』の注釈書における礼楽思想—熊沢蕃山『源氏外伝』序をめぐる—」『国際学術研究会「交響する古代」予稿集』明治大学大学院文学研究科, pp.73-78, 2010年11月

遠藤 集子

## (2) 講演・学会・研究会発表

- ・「三輪山と夢—崇神紀の皇位継承をめぐる—」国際学術研究会「交響する古代」, 2010年11月5日, 於明治大学

## (4) その他

- ・「三輪山と夢—崇神紀の皇位継承をめぐる—」『国際学術研究会「交響する古代」予稿集』明治大学大学院文学研究科, pp.61-66, 2010年11月
- ・(共著)「加計呂麻島のシマの空間」『日本古代学』3, pp.111-115, 2011年3月

久保田 由香

## (2) 講演・学会・研究会発表

- ・「光源氏が「月の都」に託した想い—仏典, 中国文学, 『竹取物語』との比較を踏まえて—」第9回韓国語文学国際学術会議, 第4回明治大学・高麗大学校学術交流行事, 2010年8月23日, 於高麗大学校 Dongwon Global Leadership Center

鈴木 裕之

## (2) 講演・学会・研究会発表

- ・「『野行幸』に関する一考察—その位置付けを中心として—」歴史学研究会古代史部会, 2010年10月2日, 於國學院大學
- ・「古代国家の空間認識と支配—「野行幸」にみる天皇の移動について—」国際学術研究会「交響する古代」, 2010年11月5日, 於明治大学
- ・「日本古代の弓矢行事—特に歩射行事に関して—」明治大学大学院 GP 明治大学・南カリフォルニア大学学術交流会, 2010年12月7-12日, 於南カリフォルニア大学
- ・「日本古代中央軍事制度に関する考察」明治大学・高麗大学校学術交流会, 2011年3月29-30日, 於高麗大学校

## (4) その他

- ・「古代国家の空間認識と支配—「野行幸」にみる天皇の移動について—」『国際学術研究会「交響する古代」予稿集』明治大学大学院文学研究科, pp.49-54, 2010年11月

須永 忍

(1) 学術論文

- ・「律令以前における上毛野・下毛野氏」『日本古代学』3, pp.1-20, 2011年3月

(2) 講演・学会・研究会発表

- ・「地名を負う（地名+姓）氏族について」歴史学研究会古代史部会書評会・中村友一著『日本古代の氏姓制』, 2010年6月26日, 於明治大学
- ・「古代田辺氏の存在形態について」明治大学と大阪大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 2010年12月11日, 於大阪大学
- ・「古代における氏族結合について」歴史学研究会古代史部会, 2011年2月26日, 於駒澤大学

日隈 広志

(2) 講演・学会・研究会発表

- ・「集落と墓にみる弥生時代後半期の集団分化と統合への道—西日本主要遺跡群の分析を通して—」駿台史学大会, 2010年12月4日, 於明治大学

(4) その他

- ・「2010年度大会発表要旨」『駿台史学』142, 2011年3月, 駿台史学会

## ◆ニュースレター（バックナンバー）



ニュースレター第1号  
2009年3月5日発行



ニュースレター第2号  
2009年7月1日発行



ニュースレター第3号  
2009年12月1日発行



ニュースレター第4号  
2010年3月15日発行



ニュースレター第5号  
2010年7月1日発行



ニュースレター第6号  
2010年11月1日発行



ニュースレター第7号  
2011年1月11日発行



ニュースレター第8号  
2011年2月10日発行

## ◆ 2010 年度プログラム（後期）の軌跡

2010/10/ 1	運営委員会
2010/10/ 1 ~	堂野前彰子（研究推進員）によるサブゼミ「『三国遺事』を読む」（毎週金曜日）
2010/10/ 1 ~	高橋麻織・渡辺滋（研究推進員）によるサブゼミ「『小右記』を読む」（隔週金曜日）
2010/10/ 2 ~	谷畑美帆（研究推進員）によるサブゼミ「英文購読の会」
2010/10/ 5 ~	堂野前彰子（研究推進員）によるサブゼミ「『古事記』を読む」（毎週火曜日）
2010/10/21	第 2 回 国際学術研究会 実行委員会
2010/10/29	運営委員会
2010/11/ 1	ニューズレター第 6 号発行
2010/11/4 ~ 6	国際学術研究会「交響する古代」開催
2010/11/13	保坂達雄（東京都市大学人間科学部教授）による特別公開講義「琉球国王の出自をめぐる歴史伝承と信仰」
2010/11/16	南カリフォルニア大学プログラム 事前講義
2010/11/26	野崎充彦（大阪市立大学大学院文学研究科教授）による特別公開講義「朝鮮の世俗社会—野談・稗官文学を通じて—」
	船場昌子（八戸市教育委員会学芸員）による特別公開講義「林ノ前遺跡の発掘調査」
	宇部則保（八戸市教育委員会埋蔵文化財グループリーダー）による特別講義「林ノ前遺跡と馬淵川流域の蝦夷社会」
2010/12/ 2	中村大介（古代学研究所ポストドクター）による特別公開講義「朝鮮半島の青銅器時代社会」
	小笠原好彦（大学院特任教授）による特別公開講義「朝鮮半島の古代寺院と日本寺院の伽藍」
2010/12/ 3	運営委員会
2010/12/7 ~ 12	南カリフォルニア大学プログラム（4泊6日）
2010/12/11 ~ 12	明治大学と大阪大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム
2010/12/15 ~ 21	慶北大学校プログラム（6泊7日）
2011/ 1/11	ニューズレター第 7 号発行
2011/ 1/14	運営委員会
2011/ 1/15	李鎮漢（高麗大学校文科大学教授）による特別公開講義「高麗時代における宋商の往来研究と高麗・日本の貿易」
2011/ 1/20	ヴァン フーテム エレン（法政大学グローバル教養学部助教）による特別公開講義「ベルギーから見た古代日本」
2011/ 2/10	ニューズレター第 8 号発行
2011/ 2/15 ~ 19	南通大学にて東亜文化交流国際学術検討会開催
2011/ 2/16	荒木志伸・渡辺滋（研究推進員）によるサブゼミ「古代の鎌倉、文学の鎌倉を学ぶ」
2011/ 2/25	渡辺滋・高橋麻織（研究推進員）によるサブゼミ「国立歴史民俗博物館における史料熟覧」
2011/ 3/ 1	運営委員会
2011/ 3/14 ~ 16	中国社会科学院と北京大学との学術交流会開催
2011/ 3/20	紀要『日本古代学』第 3 号発行
2011/ 3/22	ブルース・パートン（桜美林大学学長特別補佐・リベラルアーツ学群教授）による特別公開講義「国境を越えた日本史研究の勧め」
2011/ 3/29 ~ 30	高麗大学校にて国際学術会議開催
2011/ 3/31	ニューズレター第 9 号発行
2011/ 3/31	平成 20 年度採択 文部科学省「組織的な大学院教育改革プログラム」複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム報告書発行

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

日本古代学教育・研究センター：12 号館 4 階・9 階 TEL・FAX：03-3296-4492

Eメール jkodaken@kisc.meiji.ac.jp ホームページ <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~jkodaken/>

教務事務部大学院事務室：リバティタワー 19 階 TEL：03-3296-4142 FAX：03-3296-4352